

# 人間の業ごう

熊谷 忍\*

去る11月6日午後、新潟大学国際交流情報活動促進会（会長津田禾粒前新大学長）の主催で第3回国際交流公開講演会が催された。テーマは『世界の環境と情報』-21世紀に生きるために-であって講師及び演題は次のようなものであった。

1. 向後元彦（東京農大客員研究員）「マングローブ生態系危機-もう1つの地球環境問題」
2. 李 太遠（高麗大学教授 韓国）「情報通信発達に伴う社会環境の変化」
3. 坂井利之（龍谷大学理工学研究科長・京都大学名誉教授）「人間活動圏と情報」などで、その後新潟大学農学部 廣田秀憲教授を交えてのパネルディスカッションがあった。

いずれのお話も興味深いものがあり地球環境の厳しい変わり様についての危機感を訴えておられたのだがここでその内容について触れる余裕は無い。

ただその中で砂漠にマングローブを育てることに命を賭けたといわれる向後元彦氏が「人類がこうして自然を破壊してゆく姿は釈迦の言う人間の業（ごう）なのでしょうか」と言われた時背筋に冷たいものが走って思わず身を乗り出してしまった。向後氏については以前津田学長から「是非読め」と戴いた『緑の冒険』の著者として存じていたので敬意をもって拝聴していたせいもあるが筆者の祖父が僧籍にあったため子供の頃「人間の業ごう」と言う言葉をよく聞かされていたせいもあっての事と思われる。

今我々は業と書いて（ぎょう）と読むのが普通である。事業、稼業、業務、業績、作業など普通に人のやる仕事、営み、生業なりかい、などですが、これが業（ごう）となると善業ぜんごう、悪業あくごうなど因果応報を内包した人間の行為と言うことになって前世の因縁、報いなどに絡んだ仏教の世界の言葉になってしまいます。人の不幸、特に肉親の葛藤、相剋のあげく当事者は望みもしないのにお互いが不幸になっていくような時、よく「これが人間の業ごうだなあ」と長嘆息する祖父の姿に子供心にも人間の内にある救いのない悲しみを感じて切なくなった記憶が向後氏の言葉で蘇ったのかも知れない。

地球は何時か膨脹する太陽に飲み込まれる運命にあると言う。その前に人類は地球環境を破壊することによって自らの手で自らの存在を絶つことになるのか。誰もそんなことになる

\* (株)興和 常務取締役

つもりでやっている訳ではない。むしろ一層の繁栄を求め、または民族を貧困から救う為にと考えてのことであろう。

我々は新潟応用地質研究会のメンバーとして地盤や地下水、地下資源などの自然環境との対応を通じて地域の開発に貢献してきたつもりである。自然と調和した開発なり建設なりを願いつつ努力したつもりであるが果たしてその結果はとなると……歴史の審判を待つしかないのかも知れない。

あちこちの首長や企業の幹部が今、獄中にある。彼等は己の業の深さをどう感じているのだろうか。